

A-036「式微」(微なり微なり胡(なん)ぞ歸らざる)『詩經』国風 邶風

「道行(みちゆき)」

AKY訳

(原詩)

(読み下し文)

ああ！

しなければ……しなければ……

あなたに会ったりしなければ……

なんで家にも帰れない

なんで夜露に濡れながら

寒さに震えて居にやならぬ

ああ！

なかつたら……なかつたら……

あなたと一緒にでなかつたら……

なんで故郷(くに)にも帰れない

なんで路傍(みちばた)身を寄せて

泥にまみれて寝にやならぬ

式微式微

微(び)なり微(び)なり

胡不歸

胡(なん)ぞ歸(かへ)らざる

微君之故

君之故微(な)かりせば

胡為乎中露

胡為(なん)すれぞ中露においてせむ

式微式微

微なり微なり

胡不歸

胡ぞ歸らざる

微君之躬

君之躬(み)微かりせば

胡為乎泥中

胡為れぞ泥中においてせむ

「あたし、あなたになんか会わなきゃよかったんだわ。あなたにあつたりしなれば、そうして、あなたといっしょにきたりしなれば。きつと今ごろは、暖かいお布団の中で寝ていられたのよ。ねえ、どうしておうちに帰れないの。なんで、こうして泊まるどころもなく、夜露に濡れながら、濡れた泥んこのところで野宿しなくちゃならないのよ……。帰りたい……。おうちが恋しい……。」

一時の恋に迷って、男と駆け落ちしたものの、乏しい持ち合わせも尽きてしまった。苦しい逃避行に耐えかねて、つい泣き言のひとつも出てきます。

歌舞伎にでも出てきそうな道行の場面、こういう芝居は、やっぱり福助だろうなあ。こんなときの福助は、芝居もいいけど、声がね。歌舞伎手帖(二〇〇八年版)を見てたら、「美声」って書いてあったけど、美声っていうのは、ちよつと違うのよね。なんていうか色っぽいです。好きなんだよなあ、あの声。あの声でこんなせりふを言われたんじゃあ、もう、たまりませんね。ぞくぞくします。

### 「使われている言葉について」

- 式、発語のことば、「ああ」、「それ」、など。
- 微、……でなかったならば、……しなかったならば。
- 胡、なんで、どうして。
- 乎、疑問の助辞
- 中露、露中。野ざらし。
- 泥中、どろまみれ

この詩にもいろいろな解釈があるようです。わたしは、駆け落ちした女の人の嘆きをイメージして詩にしましたが、帰ってこない夫を待ちわびる詩、あるいは、亡命している君主に帰国を勧める臣下の詠んだ政治的な詩と考える方もいます。

待ちわびている妻や、亡命しているとはいえ、一国の君主だったものが、何で露にぬれたり、泥の中にいるのか、わたしには、よくわかりません。

政治的な詩とする考え方では、「中露」や「泥中」を比喩的な表現として考えることもできるかもしれません。しかし、それでは、主題が普遍性にかけて、民謡として広く支持され、永く伝わるには、弱いように思います。

### 「詩経の解釈について」

昔から、詩経の解釈にはいろいろあるようです。同じ詩が、政治的な詩とされたり、恋愛詩とされたり、あるいは亡き人を悼む詩とされたり、まったく違った解釈がされています。

吉川幸次郎さんは、学人の翻訳、文士の翻訳の区別をされたといわれますが、専門家が学説として主張する際には、はっきりした根拠資料を伴っていることが必要だと思います。

しかし、中国文学や漢字学の専門家の書かれた訳や解説書を読んでも、例えば「恋愛詩である。政治詩と考えるべきでない。」などと、明確に主張されているにもかかわらず、その根拠になると、全く記載されていないか、せいぜい、「詩序でそういっている」とかいうような、いわば伝聞記事だけで、著者自身が、何故、そう考えたのか、どうしてそう考えることができるのか、はっきりとした根拠を挙げて、きちんと説明しているようなものは、私の見た限りありません。いいかえると、吉川さんのいう学人の翻訳というものはなくて、ほとんどが文士の翻訳なのだといっていると思います。